

【原著】

臨床心理面接における カウンセラー・クライアント関係に関する研究

— カウンセラー・クライアント両者の体験の質的分析 —

金 沢 吉 展 (明治学院大学心理学部)

上 野 まどか (明治学院大学心理学部附属研究所)

横 澤 直 文 (藤沢病院/明治学院大学心理学部附属研究所)

中 山 愛 美 (学習院大学大学院人文科学研究科)

要 約

カウンセラー (CO) 5名 (8 ケース) とクライアント (CL) 6名を対象に、面接において最もプラスの方向に進んだと思われる体験と最もマイナスの方向に進んだと思われる体験について、半構造化面接により調査を行った。得られた語りについて質的分析法を用いて分析を行った結果、安心して話したいという基本的なニーズをCL全員が有していることが示された。また、CLのうち5名は面接プロセスのいずれかの時点において心地よさを感じられない体験を有しており、その際には、受容・共感や、明確な枠組みなどが提示されていなかったと感じていたことが示された。COの対応がCLの現状や状態に合わない時にはCLにとって負担となる場合があることも示された。COは、CLが安心して話せる態度、言動を示し、CLを守る枠組みを維持するとともに、CLの状況・ニーズについて十分にアセスメントを行う必要があることが示唆された。

キーワード：プロセス研究、インタビュー調査、クリティカル・インシデント法、グラウン
デッド・セオリー・アプローチ、カウンセラー-クライアント関係

1. 問題・目的

カウンセリング・心理療法 (以下、「カウンセリング」) の効果は既に証明されており、様々な理論的アプローチ間に効果のうえで違いはないことが重ねて示されてきた (Landman & Dawes, 1982; Shapiro & Shapiro, 1982; Smith & Glass, 1977)。これまでの研究では、様々な理論的アプローチの間に共通する共通要素が、心理療法の効果の重要な部分を占めることが指摘されている (Lambert & Barley, 2001)。例えば Laska ら (Laska, Gurman, and Wampold, 2014) は、共

通要素のうち、作業同盟 (working alliance) がカウンセリング効果に及ぼす影響を7.5%、共感が及ぼす影響を9.0%、目標に関する合意・コラボレーションによる影響は11.5%であると示している。一方、心理療法アプローチの具体的な技法などによる影響は、デスマントリング法によれば0.0%、プロトコルに従っている程度が与える影響は0.1%未満であると論じている。

このように、カウンセリング効果に影響を与える重要な要因はカウンセラー (以下、「CO」)-クライアント (以下、「CL」) 関係であることが示されており (Horvath, Del Re, Flückiger, &

Symonds, 2011; Norcross & Wampold, 2011), とりわけ作業同盟が現在の研究の中心として位置づけられている (Crits-Christoph, Gibbons, & Mukherjee, 2013; Llewelyn, Macdonald, & Aafjes-van Doorn, 2016)。作業同盟はCO・CL両者の情緒的つながり, および, カウンセリングの目標と方法・内容に関する合意と定義されており (Bordin, 1979; Horvath & Greenberg, 1989), 作業同盟とカウンセリング効果との間には, $r = .275$ (Horvath, Del Re, Flückiger, & Symonds, 2011), $r = .294$ (Flückiger, Del Re, Wampold, Symonds, & Horvath, 2012) といった相関が一貫して示されている。

CO・CL両者がカウンセリングの目標と方法・内容に合意し, 情緒的つながりを構築することは重要であるが, 現実には, 両者が目標などについて常に合意しながらカウンセリングが進むとは限らない。CO・CL両者の間では, カウンセリングに要する時間に対する期待 (Pekarik & Wierzbicki, 1986), カウンセリングのプロセス・効果や作業同盟に対する評価 (Coutinho, Ribeiro, Hill & Safran, 2011), カウンセリングを終結した理由に関する認知 (Hunsley, Aubry, Verstervelt, & Vito, 1999) 等において, 様々な差異が報告されている。

CO・CL両者の視点や体験の違いは, 両者の関係構築の難しさや, 関係の崩れにつながるおそれがある。しかし, CO・CLそれぞれが, 作業同盟の亀裂・崩れ (rupture) に気付くことは難しいことが報告されている (Regan & Hill, 1992; Rhodes, Hill, Thompson, & Elliott, 1994)。その一方, 臨床場面においては, CO・CL両者の期待や思惑と対応等との食い違いから生じた作業同盟の亀裂への対応が重要であることも指摘されている (Muran, Safran, Gorman, Samstag, Eubanks-Carter & Winston, 2009; Safran, Muran, & Eubanks-Carter, 2011)。

海外においては, どのような要因が作業同盟の形成・維持, あるいは亀裂につながるのか (例えば Coutinho, Ribeiro, Hill, & Safran, 2011; Kivlighan & Shaughnessy, 2000), さらに,

生じた亀裂がどのように修復されるのかについて (例えば Chen, Atzil-Slonim, Bar-Kalifa, Hasson-Ohayon, & Refaeli, 2018; Safran, Muran, & Eubanks-Carter, 2011; Stiles, Glick, Osatuke, Hardy, Shapiro, Agnew-Davies, ... Barkham, 2004) 実証的研究が積み重ねられているが, 作業同盟がどのように形成・維持されるのか, あるいはどのように亀裂や崩れにつながるのか, さらに, 生じた亀裂がどのように修復されるのかについて, 国内での実証的研究は乏しい。

作業同盟を初めとするCO-CL関係に関する国内の実証的研究においては, 学生によるCOとボランティアCLを対象とした実験的研究が報告されている。リフレーミングがCLの感情に与える影響 (山本, 2008), COのミラーリング (青柳, 2013) や具体的な応答 (田中, 2006, 2007) が共感に与える影響について検証が行われている。田中・神 (2017) も, ボランティアCLを対象とした大学院生による試行カウンセリングにより, CLが共感を知覚した場面と共感されなかったと知覚した場面におけるCO側の体験を比較し, COの体験において, CLへの注目と自己への注目に違いが見られることを指摘している。CO・CLそれぞれのアタッチメントスタイルに注目した研究では, CLのアタッチメントスタイル (吉見・葛西, 2009), COのアタッチメントスタイル (吉見・葛西, 2010) それぞれが, 作業同盟と面接への評価に影響を及ぼすことが報告されている。また, CL側の共感がカウンセラー側の認知に与える影響も取り上げられている (Hashimoto, 2005)。

しかしこれらの研究はいずれも, CO役の学生とCL役の学生を対象として短時間で行われた実験的研究であり, 実際のCO-CL関係を対象とした実証的研究は見られない。ボランティアCLや学生による実験的なカウンセリング状況を用いた研究の場合, 実際のカウンセリングとは状況もCO-CL関係も異なることが想像される。また, CL側の感情の変化や知覚された共感は, それぞれ単独で存在するのではなく, CO-CL関係に生起する多様な事柄の一つである。さらには, アタッ

チメントスタイルのような CO・CL それぞれのもつ特性は、実際のカウンセリングにおいて、両者の関係が動いていく中で多様な影響を与えうると考えられる。したがって、短時間の実験的なカウンセリング場面ではなく、実際に CO と CL の間で何が生じているのか、包括的に理解することが必要と考えられる。

そこで本研究では、実際にカウンセリング面接を行った CO・CL の両者から面接における体験に関するインタビューデータを得て、両者それぞれが、CO-CL 関係が効果的に進んだと感じた状況と、困難を生じたと経験した状況を質的分析方法を用いて探り、両者の関係の構築とその崩れに関わる要因を探ることを目的とする。本研究は、心理療法プロセスのみならず、カウンセラー養成についても有用な知見を提供すると考えられる。

2. 方 法

1. 協力者

首都圏における大学付属の臨床センターにおいて、研究協力者募集期間（2016 年 8 月～2017 年 3 月）より過去 24 ヶ月以内に個人カウンセリ

ングを終結し、リファーマたは引き継ぎが為されていないケースの成人 CL の方々、および、担当していた CO を対象とした。その結果、合計 14 ケースが本研究の対象となった。

該当する CO・CL の方々に本研究の趣旨・内容について説明した文書、研究参加同意書、ならびに銀行振込依頼書を郵送し、書面による合意の得られた方々のみを対象とした。その結果、CL 6 名（計 6 ケース分）、CO 5 名（計 8 ケース分）から研究協力の申し出があり、書面による研究参加への合意を得た（Table 1, Table 2）。協力者の方々には謝礼を支払った。

本研究において「終結」とは、「カウンセリングの永続的または一時的な終わり」（Gelso & Woodhouse, 2002, p. 346）と定義する。終結には、CO・CL 両者が合意する場合もあるが、CO 側の都合で終結が行われる場合や、来談を取りやめるなどの形で CL 側が終結を先導する場合もある（Gelso & Woodhouse, 2002）。これに加えて、CL がキャンセル等によって来談しなくなり、今後再来談することになるのか不明な場合もある。そこで本研究では、上述の Gelso and Woodhouse（2002）に加えて、Hatchett and Park

Table 1 研究協力者の概要（CL）

	性別	年代	主 訴	カウンセリング期間
A	女性	30 代	うつ状態	8 か月
B	女性	30 代	夫婦関係	7 か月
C	女性	50 代	家族関係	14 か月
D	女性	20 代	気持ちの整理	8 か月
E	男性	20 代	家族関係・就職活動	5 か月
F	女性	40 代	自己理解	13 か月

Table 2 研究協力者の概要（CO）

	性別	年代	臨床経験年数	理論的志向性
G	女性	20 代	1 年未満	特になし
H	女性	20 代	1 年未満	特になし
I	女性	20 代	1 年未満	特になし
J	女性	20 代	1 年	特になし
K	男性	20 代	3 年	精神分析的心理療法

(2003) を基に、終結を以下のように定義し、以下の①から⑤のいずれかに該当する場合を「終結」とした。

- ① CL・COの両者が終結に合意した。
- ② CO側の理由でカウンセリング関係が終わった。
- ③ CL側の理由でカウンセリング関係が終わった。
- ④ CLが、最後のイベントから30日以内に次回の予約を入れなかった。「イベント」とは次のいずれかを指す。
 - a) 面接, b) 予約時に来室しなかった, c) CLによるキャンセル, d) COによるキャンセル
- ⑤ CLによるキャンセルあるいは予約に来ないという事態が2回続き、その次の予約が入らなかった。

2. インタビュー調査

2016年9月から12月に半構成的なインタビューを参加者個人に電話もしくは対面形式で60分間程度実施した。COについては5名中4名が電話、1名が対面によるインタビューであった。CLについては6名中4名が電話、2名が対面インタビューであった。インタビュー調査について訓練を受けた大学院生または臨床心理士がインタビューを担当した。インタビューに際してはクリティカル・インシデント法(Flanagan, 1954)を用いた。この方法は、研究協力者に対して特定の出来事・事象やそれに関わる体験について詳しい描写を求めるものである。クリティカル・インシデント法はCO-CL関係に関する質的研究においてしばしば用いられており、その場合は、CO-CL関係を促進するポジティブ要因(Bedi, Davis, & Williams, 2005; Fitzpatrick, Janzen, Chamodraka, & Park, 2006)あるいはネガティブ要因(Richards & Bedi, 2015)に焦点を絞って研究が行われている。そこで本研究においては、CO-CL関係において最も良かったと感じられた体験と最も良くなかったと感じられた体験に焦点を当て、COとCL両者の体験を比較することとした。

インタビュー内容は、①CO(またはCL)との面接の中で、最もプラスの方向に進んだと思われる体験、②CO(またはCL)との面接の中で、最もマイナスの方向に進んだと思われる体験、および③現時点でのふりかえりを中心に、それぞれについて詳しく回答を求めた。得られた語りを、本論文の著者4名(いずれも質的分析に関する経験を有する臨床心理士)によりグラウンデッド・セオリー法(Corbin & Strauss, 2008 操・森岡訳2012)に準じてコード化し分析を行った。

なお、本研究においては、COに対して、CLとの関係構築や関係の発展について有益であった教育訓練や経験などについても尋ねているが、本報告においては、上記のプラス・マイナス体験について報告することとする。

3. 倫理的配慮

協力者募集時において、当該大学大学院博士前期課程在学学生あるいは在職中のCOが担当したケース、ならびにこれらのCOは調査対象から除外した。CLについては、個人情報当該機関における研究に用いられる可能性も含めて当該機関における相談への合意を初回来談時に署名によって示したCLに限定した。

参加者募集の際、本研究の内容を書面によって説明の上、研究参加に関わる同意書と同意撤回書も併せて添付した。募集の際の書面には、①本人の了解を得たうえで録音すること、②研究参加は任意であり、途中で参加の同意撤回も可能なこと、③分析に関わる人間以外はデータを閲覧しないこと、④固有名詞等のプライバシーに関わる情報は記号に置き換えた上で逐語録を作成すること、⑤データは研究室の鍵のかかる棚に保管し、厳重に管理・保管すること、等を明記した。逐語録作成後は本人による内容の確認を得た。

なお、本研究は明治学院大学心理学部倫理委員会の承認を受けて実施された。

3. 結 果

グラウンデッド・セオリー法による分析の結

果を次に示す。カテゴリーの名称には、カテゴリーの大きさによって、**大カテゴリー**、《中カテゴリー》、〈小カテゴリー〉と囲み線や記号をつけて示す。また、()内の斜線 (/) の右側が協力者の人数 (CO の場合はケース数)、左側がそのカテゴリーの内容を語った人数 (CO の場合はそのカテゴリーに該当するケース数) を示す。

1. CL の体験

1-(1) プラスの体験 (Table 3)

プラスの体験に関する語りは全員から語られ、**CO のプラスの関わり (6/6)** と **肯定的に変化する (5/6)** に大きく分けられた。**CO のプラスの関わり (6/6)** には、《受容的・共感的対応に安心感を得る (6/6)》と《具体的な行動の提案を得る

(3/6)》が含まれた。《受容的・共感的対応に安心感を得る (6/6)》は、「否定してこない」、「話をよく覚えてくれている」、「笑顔できいてくれる」などの CO の聴き方や、「秘密が守られる」「利害関係がない」といったカウンセリングの物理的・心理的枠組みがあることが語られた (〈話しやすく、安心感を得られる (6/6)〉〈枠組みがあることで安心する (5/6)〉)。また、「なんでも話をしたいと声をかけてくれる」「領いたりメモして、黙って (きいていた)」といった CO の態度と言動によって〈話す内容とペースを尊重してくれた (4/6)〉と感じていたようであった。このような体験から、CL にとって受容・共感を得る体験となり、安心して話せることに繋がっていた。また、受容・共感される体験だけではなく、「読書」や

Table 3 プラスの体験 (CL)

(N=6)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	CL の語りのまとめ
CO のプラスの関わり (6/6)	受容的・共感的対応に安心感を得る (6/6)	話しやすく、安心感を得られる (6/6)	緊張していたが、自分の気持ちのままに話していい場所なんだと思い、話しやすかった (CL. D) 自分を否定してこない信頼ができ、何を言っても大丈夫だと思える (CL. A)
		枠組みがあることで安心する (5/6)	お金を払っていて、CO は仕事なので、何を言ってもいいという安心感があった (CL. B) 秘密が守られるので、何を言っても大丈夫という心構えがある (CL. A)
		話す内容とペースを尊重してくれた (4/6)	話すのを遠慮したり考えたりした時に、なんでも話をしたい時間と声をかけてくれることがあった (CL. C) 話が脱線したり長くしゃべってしまっても、決して軌道修正せず、そのまま聞いてくれた (CL. D)
		具体的な行動の提案を得る (3/6)	(もやもやしている人間関係について) 出さなくてもいいが手紙を書いてはどうかという提案をしてくれて、それがいい経験だった (CL. D) 完璧じゃなくとも少しやれていることを具体的、視覚的に表現する提案をしてもらってよかった (CL. F)
肯定的に変化する (5/6)	荷下し体験を得る (4/6)		家族から家のことであれこれ言われることが負担になっていて、家族への不満やわかってくれなさいの話を引き出してくれた (CL. F) 家族のことを話して気が楽になった (CL. E)
		自己理解と自己への気づきを得る (3/6)	自分で状況や思いについての気付きが積み重なっていくことが成功体験としてある (CL. A) セッションの最後にまとめを言ってくれることで自分の話したことを逆輸入のように自覚し、自己理解を重ねた (CL. A)
		意識・行動が変わる (3/6)	話し続けることで、どんどん頭が整理されていく。言語化することで自分の悩みや問題がわかり、解決法について考え、決断が出せる (CL. A) (CO に)他のことも相談してみようと思うきっかけになった (CL. F)
		否定的感情が和らぐ (3/6)	駄目駄目と言っていたのがいいかなと思えるようになり、ちょっと楽になった (CL. F) 聞いてくれる人がいたという点で少し落ち着いたり不安が少し解決したと感じる (CL. E)

「手紙を書く」など《具体的な行動の提案を得る(3/6)》ことも、プラスの体験に繋がっていると語られた。

それらのCOからの関わりを経て、CLは「肯定的に変化する(5/6)」体験をしていた。具体的には、「気が楽になった」などの〈荷下し体験を得る(4/6)〉、〈自己理解と自己への気づきを得る(3/6)〉、〈意識・行動が変わる(3/6)〉、〈否定的感情が和らぐ(3/6)〉が語られた。

1-(2) マイナスの体験 (Table 4)

6名中5名から、カウンセリングのいずれかの時点においてマイナスの体験を有していたことが語られた。マイナス体験は、「歯車がかみ合わない(5/6)」と「マイナスの事態が起こる(5/6)」に大きく分けられた。「歯車がかみ合わない(5/6)」は、「信頼感・心地よさを感じられない(5/6)」と《COの対応が期待・状況・ニーズと合わない(4/6)》から構成された。《信頼感・心地よさを感じられない(5/6)》の具体的な体験は、「誘導された感じ」「強制的」「(CLがCOに)気を遣っ

た」など〈自分が思うペース・内容で自由に話すことができない(4/6)〉や、「相手(CO)が自分の気持ちを返してても、(中略)じっくりこない」といった〈COに理解してもらえない(2/6)〉体験、また「(COに)個人的なことをどの程度話しかけていいのか、悩ましく思っていた。」という〈COとの距離感に戸惑いを感じる(1/6)〉体験が語られた。《COの対応が期待・状況・ニーズと合わない(4/6)》では「解決策が現状と合っていない」「どんどん聞かれていくと(略)段々辛くなっていった」など、COの介入や深めていく対応が、その時のCLにとって合っていなかったことが語られた。

これらのCL-CO間の歯車がかみ合わない、「じっくりこない」体験を経て、「問題は解決しないまま」などCLは〈発展が見られない(5/6)〉と感じたり、カウンセリングが中断するなど〈主訴、関係性が悪化する(2/6)〉といった、「マイナスの結果が起こる(5/6)」展開になった状況もあったことが語られていた。

Table 4 マイナスの体験 (CL)

(N=6)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	CLの語りのまとめ
歯車がかみ合わない(5/6)	信頼感・心地よさを感じられない(5/6)	自分が思うペース・内容で自由に話すことができない(4/6)	自分の言葉でまとめて表現するように誘導された感じがした。たぶん、COがまとめていただけという感じで、強制的だったと感じた(CL. C) COが下を向いて書いていると、話しかけていいのか駄目なのかと気を遣った(CL. B)
		COに理解してもらえない(2/6)	カウンセラーが自分の気持ちを表現してくれるが、違うということが表情に出るので、カウンセラーが上手く気持ちを読み取れないことを謝っていた(CL. F)
		COとの距離感に戸惑いを感じる(1/6)	雑談や個人的なことをどの程度話しかけていいのか、悩ましく思っていた。仲良くなりたい気持ちが出てしまい、その気持ちを抑えないといけないと思うことがあった(CL. D)
マイナスの結果が起こる(5/6)	発展が見られない(5/6)	COの対応が期待・状況・ニーズと合わない(4/6)	自分を見つめ直さなきゃいけない、そこまでの元気が無くて負担になっていった(CL. F) COから提案された解決策が、現状の家族関係と合っていなかった(CL. B)
		主訴、関係性が悪化する(2/6)	外部機関を紹介されたが、電話する勇気が出なくて問題が解決しないままだった(CL. E) 不満を聞いてもらう形に終始した(CL. B)
			COを信頼しきれず、結局カウンセリングに行こうという気にもならなかった(CL. F) 家族関係の悪化をせき止めたたくて始めたのに、家族がどんどん離れていくような状況になった(CL. B)

2. CO の体験

2-1) プラスの体験 (Table 5)

CO 側から見る CL にとってプラスの体験につ

ながる事柄は、CO が援助的に関わる (8/8)、効果
 果的な関係性と場を構築する (7/8)、CO 自身が
 成長する (7/8)、CL が変化する (8/8) に大きく

Table 5 プラスの体験 (CO)

(N=8)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	CO の語りのまとめ
CO が援助的に 関わる (8/8)	異なる視点を提供する (6/8)		CL のトラブルへの乗り切り方では、と CO がリフレーミングすることが、CL の中でしっくりきたようだった (CO. J)
	基本的な傾聴行動を行う (5/8)		他に話せる人がいなかったのか、CL のつもりにも積もった思いを聴くことが少しはプラスになったと思う (CO. G) CL は自分が話すことを CO が映してくれて、自分が考えている時に何か一言言ってくれる、それがすっと入る、と言っていた (CO. K)
	行動上のアドバイスをを行う (3/8)		このままじゃだめですよねというところから、こうやってみるのはどうかという言い方が少し多くなっていった (CO. K)
	直面化を促す (2/8)		何も困っていることはないと言っていたのに、困っているっぽいことを言ったので「今の話して困ることなんじゃないかなーって思うんですけど」と聞いた泣いた。動きが出せた介入だったと思う (CO. I)
	感情を扱う (2/8)		最初は怒りを主訴に来ていたが、細かく感情を一つ一つ見ていくといいということや、期待しないのも一つの手だということを話した (CO. K)
	CL のニーズを探り、それに応える (1/8)		対人関係で上手くいかなかったことがあったので、話しながらコミュニケーションのあり方を考えることと、検査を行って自分の特徴を知ることについて話をした (CO. K)
効果的な関係と 場を構築する (7/8)	CL が話せる場の構造を提供する (4/8)		生活の中で困ったことがあるとずっと考えていたが、面接で話せばいいや、と生活から悩みを棚上げできるようになったと言っていた (CO. K)
	適切な CO-CL 関係を構築する (4/8)		あまり侵襲的になりすぎず、良い距離感で伝えられたのではないかと 思う (CO. K)
	カウンセリングの目標・方法を共有する (2/8)		CL が出してきたものを CO が一緒に見て、一緒に考えるみたいな、そういう確かなものがあった気がする (CO. J)
CO 自身が成長 する (7/8)	カウンセリング場面における自己への気づき・自己理解を得る (4/8)		SV で CO のイライラをちゃんと扱ったことが、CL と CO 自身を理解する意味で役立った (CO. H)
	知識・スキルを得る (4/8)		SV では言葉の言い回し方や柔らかく伝える技術が勉強になった (CO. I)
CL が変化する (8/8)	問題の解決・緩和に向けて CL 自身が新たな考えを得たり、行動する (7/8)		仕事楽しい時と辞めたい時との波が激しすぎると伝えると、本人もその波を自覚できて、今は辞めるタイミングではないと自分の中で考えられるようになった (CO. K)
	気づきと内省を 得る (6/8)	自己への気づき・自己理解を得る (5/8)	漠然とできていないという部分を置いておいて、実際に自分ができている部分を見れるように、いえるようになっていった (CO. J)
		内省する (2/8)	後半は CL の中で自分と対話するための練習の場のような感じになっていた (CO. J)
	CL の感情が安 定する (3/8)	CL が自己の感情をコントロールする (2/8)	怒りの質が変わり、自分にできることは何かを立ち止まって考えられるようになった (CO. K)
		CL の感情が肯定的に変化する (2/8)	落ち込み気味の CL だったが、徐々に上向きになっていった (CO. H)
	CL がカウンセ リング場面に コミットする (3/8)	自己開示をする (3/8)	回数を重ねてから自分の弱いところを話せるようになった (CO. K)
		CL がカウンセリングに対して積極的に関わる (2/8)	最初の方は遅刻をしていたが、段々慣れたのか時間の枠も安定してきた (CO. K)

分けられた。COが援助的に関わる(8/8)は具体的に、「リフレーミング」などでCLがそれまで考えていたものとは〈異なる視点を提供する(6/8)〉ことや〈行動上のアドバイスを行う(3/8)〉だけではなく、「つもり積もった思いを聴き」「話すことを映してくれる」といったCOの〈基本的な傾聴行動を行う(5/8)〉も含まれた。また、CLが触れられないことに〈直面化を促す(2/8)〉、「細かく感情をひとつひとつ見ていく」といった〈感情を扱う(2/8)〉働きかけも挙げられた。これらの関わりの中で1ケースについては、CLの心理的・現実的な動きを把握し、カウンセリングを重ねていったことがプラスの体験となったように思われると語られた(〈CLのニーズを探り、それに応える(1/8)〉)。

効果的な関係性と場を構築する(7/8)としては、「生活で困ったことがあっても面接で話せばいい」と思えるような〈CLが話せる場の構造を提供する(4/8)〉といった物理的側面だけでなく、「侵襲的になりすぎず、良い距離感」を保てる関係を作り、「CLが出してきたものをCOが一緒に見て考える」ような体験を得ることが挙げられた(〈適切なCO-CL関係を構築する(4/8)〉、〈カウンセリングの目標・方法を共有する(2/8)〉)。

そして、CLが変化する(8/8)こととして、〈問題の解決・緩和に向けてCL自身が新たな考えを得たり、行動する(7/8)〉ようになったり、CLが〈自己への気づき・自己理解を得る(5/8)〉〈内省する(2/8)〉といった、行動面と心理内の側面両方におけるCLの変化が挙げられていた(《気づきと内省を得る(6/8)》)。また、他には〈CLが自己の感情をコントロールする(2/8)〉〈CLの感情が肯定的に変化する(2/8)〉など《感情面での安定(3/8)》が生じたり、〈自己開示をする(3/8)〉ことや〈CLがカウンセリングに対して積極的に関わる(2/8)〉といったカウンセリングに対する取り組み方に変化が生じた(《CLがカウンセリング場面にコミットする(3/8)》)。

また、CO自身も〈カウンセリング場面における自己への気づき・自己理解を得る(4/8)〉〈知識・スキルを得る(4/8)〉といったCO自身が成

長する(7/8)体験を得ていた。

2-2) マイナスの体験 (Table 6)

CO側から見るCLのマイナス体験は、COの援助的な関わりが不足する・不十分になる(8/8)、効果的なCO・CL関係の構築に困難が生じる(7/8)、CO側に課題がある(7/8)、マイナスの結果が起こる(2/8)に大きく分けられた。COの援助的な関わりが不足する・不十分になる(8/8)は、「(CLが語る)思いを深く掘り下げなかった」「話題が点々として」しまい〈取り組むべき重要な課題を扱えない(8/8)〉〈感情を扱えない(4/8)〉と〈CLのニーズに応えられない(6/8)〉ことになり、マイナスの体験につながったが、その背景として〈CLについてのアセスメントが不十分だった(5/8)〉ことが語られた。うち2ケースでは〈具体的な提案・アドバイスができなかった(2/8)〉こと、〈受容・共感が不足した(2/8)〉ことも挙げられた。

また、こうしたカウンセリング内での具体的な関わりだけでなく、効果的なCO-CL関係の構築に困難が生じる(7/8)では、〈目標が不明確・曖昧である・合意できていない(7/8)〉ことが7ケースにおいて言及された。他に、「COの修了」のために期間が限られるなど当該機関の限界や、「距離が近くなりすぎた」「聴いているだけで精一杯だった」とCOとして十分に機能できない状況があった(〈効果的な治療関係を構築できない(5/8)〉〈面接構造が不十分だった(4/8)〉)。これらの要因からマイナスの結果が起こる(2/8)として、CLの感情が不安定になったり、現実の状況が悪化する展開となったケースもあった(〈CLの感情・状況が悪化する(2/8)〉)。

関係の構築や援助的な関わり不足と関連して、CO側に課題がある(7/8)ことも挙げられ、「どう深めてよいかわからない」状況で質問に困ったり、教育や服薬について知らないことがあったという知識・スキル面だけでなく(〈知識・スキルが不足した(7/8)〉)、〈COが自身の感情や考え・思い込みに影響された(5/8)〉ことがあった。そのうち2ケースにおいては、スーパービジョン(SV)を受ける回数が少なかったり、SVの中で

Table 6 マイナスの体験 (CO)

(N=8)

大カテゴリー	小カテゴリー	COの語りのまとめ
COの援助的な関わりが不足する・不十分になる(8/8)	取り組むべき重要な課題を扱えない(8/8)	CLの仕事に対する思いをちゃんと掘り下げなかった。解釈的に言葉を返すことをしていなかった(CO. K) 一つ的话题を深めるよりも話題が転々としてしまい、色々なことをただ聞くだけみたいになってしまった(CO. H)
	CLのニーズに応えられない(6/8)	COに何を求めているかを出してきてはいなかったと思うが、それがCLの助けの求め方だったのかもしれない。そのタイミングで色々提案できなかったのはマイナスだったと思う(CO. G)
	CLについてのアセスメントが不十分だった(5/8)	一つの可能性をあまり広げて考えていなかった部分もあるかもしれない。いろいろな可能性を話すためにも色々アセスメントできれば良かったのではないか(CO. K)
	感情を扱えない(4/8)	現実の状況がCLが求めている方向にいていた。CO自身がふがいなさを感じていたが、それをもっと2人で味わえばよかったと思う(CO. K)
	具体的な提案・アドバイスができなかった(2/8)	(COは)CLにアドバイスをせずに聴いているだけだったので、CLは物足りなさを感じており、実際にどうすれば良いかという話になっていった(CO. G)
	受容・共感が不足した(2/8)	家族の話を書くことで、家族の話しかしてはいけないのか、私なんかの話をしてよいのか、とCLが聞くことがあった。COが話題提供をしようとすることで、結果的にCLがしゃべりにくい状況にしてしまうと思った(CO. H)
有効なCO-CL関係の構築に困難が生じる(7/8)	目標が不明確・曖昧である、合意できていない(7/8)	話す内容がまとまっていないし、COもどこに手を付けていいかわからない感じだった。お互いよくわからないまま話を進めていた(CO. K)
	効果的な治療関係を構築できない(5/8)	CLとの距離が近くなったのは、良い近さでもあり、少し悪い近さでもあった。ラフになりすぎと感じた(CO. K) CLの話聴いているだけで精一杯だった(CO. G)
	面接構造が不十分だった(4/8)	COの修了を機に終結となったが、もう少し時間がほしかった(CO. J)
CO側に課題がある(7/8)	知識・スキルが不足した(7/8)	どう深めてよいか分からず、CLが話したいことと言うよりも、COが気になったことを聞くような関係になっていた(CO. H)
	COが自身の感情や考え・思い込みに影響された(5/8)	気まずい空気にCOが耐えられず何かキューを出してしまうカウンセリングが毎回続いた(CO. I)
	SVが不十分だった(2/8)	あまりSVが受けられなかった。SVで受動的にならずに動けていたら、全然違うと思う(CO. I)
マイナスの結果が起こる(2/8)	CLの感情・状況が悪化する(2/8)	信頼はするが期待しないということを伝えたが、期待しないの方がはまりすぎて、CLが職場をすごく嫌いになった時があった(CO. K)

「受動的になりすぎた」ことも述べられた(〈SVが不十分だった(2/8)〉)。

4. 考 察

CLの語りからは、安心して話したいという基本的なニーズをCL全員が共通して有していることが示された。CLが求める安心感には、①CO

から受容・共感されること、②物理的・心理的な枠組みでCLが守られること、③CLが話す内容もペースもCLの自由な意思に任されていることが深く関係していた。CL協力者6名のうち5名はカウンセリングのいずれかの時点において、COに信頼感が持てなかったり心地よさを感じられない体験を有しており、上記の3点において、COの対応がCLの必要としていたことと異なっ

ていると体験されていた。ここから、COはCLが安心して話せる態度、言動を工夫し、CLを守る枠組みを維持していくことが関係性構築において重要であることが示唆された。

また、「自分を見つめ直さなきゃいけない」「解決策が現状と合っていないかった」などとCLが語ったように、感情を扱ったり、具体的な提案を行うなど、COがCLに対して積極的な対応を行った際も、それがCLの現状や状態に合わない時にはCLにとって負担となることが示された。したがって、COはそのような対応を行う際には、その時のCLの状況・状態について十分にアセスメントを行う必要があることが示唆された。

以上の結果から、CO-CL関係の構築・維持と、その崩れに影響を与える要因として、CLがCOから受容・共感され、明確な枠組みによって守られていると感じ、面接場面における言動が自身の意思に任されていると感じること、そして、COによる対応がCLのニーズや状況に合致していることが挙げられる。これらの要因が、CO-CL関係のどこかの時点において満たされなかった場合には、CLにとっての負担につながり、発展がない、あるいは悪化といったマイナスの体験につながっていくことが考えられる。

CLが経験する変化には、気づき、自己理解、認知・行動の変化、否定的感情の緩和のみならず、他者に話すことができなかつた事柄について打ち明ける体験も含まれている。一方、そのような体験が得られないことも、CLにとってマイナス体験として経験されていることが分かる。ここから、他者に開示できない自己の体験等について、COに開示すること自体も援助につながることを想像される。したがって、CLが安心して自己について語るような安全な場を提供することは、COにとって重要な役割であることが示唆される（Farber, Berano, & Capobianco, 2004; Kahn, Achter, & Shambaugh, 2001）。

受容・共感、CLに対する尊重、明確な枠組み、CLの期待やニーズに応じた対応は、カウンセリングの基本であるだけでなく、その効果も既に実証的研究によって示されてきている（Nor-

cross, 2011）。本研究の結果は、海外の先行研究（例えば Horvath, Del Re, Flückiger, & Symonds, 2011; Norcross & Wampold, 2011）が示すように、カウンセリングの効果に対してCO-CL関係がもたらす重要性を示唆していると考えられる。

CLが抱く期待が心理療法の効果やドロップアウトに影響することは既に知られており（Constantino, Glass, Arnkoff, Ametrano, & Smith, 2011; Swift, Callahan, & Vollmer, 2011）、本研究においてもCLにとって、自身のニーズや期待に応えられているかは、カウンセリングの効果に影響を与える要因であることが示されている。

一方COは、自身の行いや態度に問題あるいは不全感を感じたり、自分自身にも課題があることを語っている。専門職であるCOが自身のスキル面に注目して自己吟味を行うことは当然であるが、COはカウンセリングにおいて、関係的側面よりも技術的側面を過大視する傾向があり（Timulak, 2010）、その結果、カウンセリングに効果が見られないことや、CLの状態の悪化につながってしまう危険性がある（Lambert, 2013）。その一方でCLは、面接場面においてマイナス体験を有していたとしても、COに気を遣い、不満や異論は口に出さないことが報告されている（Baumann & Hill, 2016; Farber, 2003）。本研究においても、CLにおいては6ケース中5ケースにおいてマイナスの体験が報告されているが、COにおいては8ケース中2ケースにおいてのみマイナスの結果が報告されている。したがってCOは、CLのネガティブな変化に気づきにくいおそれがあり、その背景として、COが自身のスキル面に注目し過ぎている可能性が想像される。

本研究の結果を踏まえると、実際のカウンセリング場面において、COはまず、CLにとって話しやすい態度や安心のできる構造を提供することが肝要であると言えよう。また、CLのニーズや目標等を的確に把握し、目標・方法を共有することも必要である。そこでCOには、初回面接においてCLの主訴やニーズなどについてアセスメントを行うのみならず、面接プロセスを通じて、

CL が体験していることについてのアセスメントと、面接場面における CO 自身の体験や理解について、フィードバックを継続的に行うこと (Lambert & Shimokawa, 2011; Shimokawa, Lambert, & Smart, 2010; Whipple, Lambert, Vermeersch, Smart, Nielsen, & Hawkins, 2003) が求められる。また、CO-CL 間において、今ここで何が起きているのか、両者の関係性や CL が体験していることについて取り上げること (Hill, et al., 2014; Shafran, Kivlighan, Gelso, Bhatia, & Hill, 2017) は、CO の視点を CO-CL 関係と CL の体験へと向けることになり、CO の過度な自己注目を抑制する働きもあると考えられる。

5. 本研究の限界と今後の課題

単一機関において少数の参加者を対象とした研究であり、本研究結果の一般化には限界がある。また、参加者が本研究に参加した動機や主訴など、本研究参加者の特徴が結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。他の CO・CL を対象とした研究や、他の機関における同様の研究により、本研究の結果を検証していくことが求められる。

本研究の結果は、参加した CO の経験年数や発達段階によって影響されていることも考えられる。研究協力者の CO はいずれも経験年数 3 年以下であった。経験年数が少ないことによる知識・スキルの不十分さや、カウンセリング場面における対応の限界も考えられる。また、CO の発達段階に関する研究からは、初学者の特徴として、自信のなさや自己の行いに対する批判的な吟味が指摘されており (Rønnestad & Skovholt, 2013)、他の発達段階の CO よりも自己への批判や過度な注目が見られた可能性もある。

次に、本研究においては、同一ケースにおける CO と CL の回答についての比較は行っていない。同一の事象を CO と CL それぞれがどのように捉え、経験したかについて吟味することにより、カウンセリングプロセスや CO の教育について有用な知見が得られると考えられる。したがって、同

一ケースにおける両者の比較、さらには、同一ケースを対象に、時間を追って変化を探ることは重要な研究テーマとなろう。

研究方法としては、本研究のような質的研究のみならず、量的研究も行うことにより、CO-CL 関係に影響を与える要因の比較や、カウンセリング効果との関係を検証することが可能になる。また、他の質的分析法を用いることにより、異なる知見が得られる可能性も考えられる。

実際にカウンセリングを行った両者を対象とした研究により、良好な関係の重要性のみならず、CL のニーズに応えることが肝要であると示唆された。CO が CL との間で面接におけるニーズや目標等について共通理解をもち、CL が安心できる場を提供することが、カウンセリングが有効に進むために必要であると言えよう。

謝辞

貴重なお時間を割いて本研究にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は明治学院大学心理学部附属研究所 2016 年度萌芽研究プロジェクトとして行われた。

引用文献

- 青柳宏亮 (2013). 心理臨床場面でのノンバーバル・スキルに関する実験的検討 — カウンセラーのミラーリングが共感の認知に与える影響について — カウンセリング研究, 46, 83-90.
- Baumann, E., & Hill, C. E. (2016). Client concealment and disclosure of secrets in outpatient psychotherapy. *Counselling Psychology Quarterly*, 29, 53-75.
- Bedi, R. P., Davis, M. D., & Williams, M. (2005). Critical incidents in the formation of the therapeutic alliance from the client's perspective. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 42, 311-323.
- Bordin, E. S. (1979). The generalizability of the psychoanalytic concept of the working alliance. *Psychotherapy: Theory, Research & Practice*, 16, 252-260.
- Chen, R., Atzi-Slonim, D., Bar-Kalifa, E., Hasson-Ohayon, I., & Refaeli, E. (2018). Therapists' recognition of alliance ruptures as a moderator of change in alliance and symptoms. *Psychotherapy Research*, 28, 560-570.
- Constantino, M. J., Glass, C. R., Arnkoff, D. B.,

- Ametrano, R. M., & Smith, J. Z. (2011). Expectations. In Norcross, J. C. (Ed.), *Psychotherapy relationships that work: Evidence-based responsiveness* (2nd ed., pp. 354-376). New York: Oxford University Press.
- Corbin, J., & Strauss, A. (2008). *Basics of Qualitative Research* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage. (コービン, J. & ストラウス, A. 操華子・森岡崇 (訳) (2012). 質的研究の基礎 — グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第3版) 医学書院)
- Coutinho, J., Ribeiro, E., Hill, C., & Safran, J. (2011). Therapists' and clients' experiences of alliance ruptures: A qualitative study. *Psychotherapy Research, 21*, 525-540.
- Crits-Christoph, P., Gibbons, M. B. C., Mukherjee, D. (2013). Psychotherapy process-outcome research. In M. J. Lambert, (Ed.), *Bergin and Garfield's handbook of psychotherapy and behavior change* (6th ed., pp. 298-340). Hoboken, NJ: Wiley.
- Farber, B. A. (2003). Patient self-disclosure: A review of the research. *Journal of Clinical Psychology, 59*, 589-600.
- Farber, B. A., Berano, K. C., & Capobianco, J. A. (2004). Clients' perceptions of the process and consequences of self-disclosure in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology, 51*, 340-346.
- Fitzpatrick, M. R., Janzen, J., Chamodraka, M., & Park, J. (2006). Client critical incidents in the process of early alliance development: A positive emotion-exploration spiral. *Psychotherapy Research, 16*, 486-498.
- Flanagan, J. C. (1954). The critical incident technique. *Psychological Bulletin, 51*, 327-358.
- Flückiger, C., Del Re, A. C., Wampold, B. E., Symonds, D., & Horvath, A. O. (2012). How central is the alliance in psychotherapy? A multilevel longitudinal meta-analysis. *Journal of Counseling Psychology, 59*, 10-17.
- Gelso, C. J., & Woodhouse, S. S. (2002). The termination of psychotherapy: What research tells us about the process of ending treatment. In Tryon, G. S. (Ed.), *Counseling based on process research: Applying what we know* (pp. 344-369). Boston: Allyn & Bacon.
- Hashimoto, H. (2005). Functions and mechanisms of empathy in counseling: The empathic relationship between counselor and client assessed on personal criteria. *Japanese Journal of Applied Psychology, 30*, 93-100.
- Hatchett, G. & Park, H. L. (2003). Comparison of four operational definitions of premature termination. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training, 40*, 226-231.
- Hill, C. E., Gelso, C. J., Chui, H., Spangler, P. T., Hummel, A., Huang, T., ... Miles, J. R. (2014). To be or not to be immediate with clients: The use and perceived effects of immediacy in psychodynamic/interpersonal psychotherapy. *Psychotherapy Research, 24*, 299-315.
- Horvath, A. O., Del Re, A. C., Flückiger, C., & Symonds, D. (2011). Alliance in individual psychotherapy. *Psychotherapy, 48*, 9-16.
- Horvath, A. O., & Greenberg, L. S. (1989). Development and validation of the Working Alliance Inventory. *Journal of Counseling Psychology, 36*, 223-233.
- Hunsley, J., Aubry, T. D., Verstervelt, C. M., & Vito, D. (1999). Comparing therapist and client perspectives on reasons for psychotherapy termination. *Psychotherapy, 36*, 380-388.
- Kahn, J. H., Achter, J. A., & Shambaugh, E. J. (2001). Client distress disclosure, characteristics at intake, and outcome in brief counseling. *Journal of Counseling Psychology, 48*, 203-211.
- Kivlighan, D. M., Jr., & Shaughnessy, P. (2000). Patterns of working alliance development: A typology of client's working alliance ratings. *Journal of Counseling Psychology, 47*, 362-371.
- Lambert, M. J. (2013). The efficacy and effectiveness of psychotherapy. In M. J. Lambert, (Ed.), *Bergin and Garfield's handbook of psychotherapy and behavior change* (6th ed., pp. 169-218). Hoboken, NJ: Wiley.
- Lambert, M. J., & Barley, D. E. (2001). Research summary on the therapeutic relationship and psychotherapy. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training, 38*, 357-361.
- Lambert, M. J., & Shimokawa, K. (2011). Collecting client feedback. *Psychotherapy, 48*, 72-79.
- Landman, J. T., & Dawes, R. M. (1982). Psychotherapy outcome: Smith and Glass' conclusions stand up under scrutiny. *American Psychologist, 37*, 504-516.
- Laska, K. M., Gorman, A. S., & Wampold, B. E. (2014). Expanding the lens of evidence-based practice in psychotherapy: A common factors perspective. *Psychotherapy, 51*, 467-481.
- Llewelyn, S., Macdonald, J., & Aafjes-van Doorn, K. (2016). Process-outcome studies. In J. C. Norcross, G. R. VandenBos, D. K. Freedheim, & B. O. Olatunji (Eds.), *APA handbooks in psychology. APA handbook of clinical psychology: Theory and research* (pp. 451-463). Washington, DC: American Psychological Association.
- Muran, J. C., Safran, J. D., Gorman, B. S., Samstag,

- L. W., Eubanks-Carter, C., & Winston, A. (2009). The relationship of early alliance ruptures and their resolution to process and outcome in three time-limited psychotherapies for personality disorders. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training, 46*, 233-248.
- Norcross, J. C. (Ed.). (2011). *Psychotherapy relationships that work: Evidence-based responsiveness* (2nd ed.). New York: Oxford University Press.
- Norcross, J. C. & Wampold, B. E. (2011). Evidence-based therapy relationships: Research conclusions and clinical practices. *Psychotherapy, 48*, 98-102.
- Pekarik, G., & Wierzbicki, M. (1986). The relationship between clients' expected and actual treatment duration. *Psychotherapy, 23*, 532-534.
- Regan, A. M. & Hill, C. E. (1992). Investigation of what clients and counselors do not say in brief therapy. *Journal of Counseling Psychology, 39*, 168-174.
- Rhodes, R., Hill, C. E., Thompson, B. J., & Elliott, R. (1994). Client retrospective recall of resolved and unresolved misunderstanding events. *Journal of Counseling Psychology, 41*, 473-483.
- Richards, M., & Bedi, R. P. (2015). Gaining perspective: How men describe incidents damaging the therapeutic alliance. *Psychology of Men & Masculinity, 16*, 170-182.
- Rønnestad, M. H., & Skovholt, T. M. (2013). *The developing practitioner: Growth and stagnation of therapists and counselors*. New York: Routledge/Taylor & Francis Group.
- Safran, J. D., Muran, J. C., & Eubanks-Carter, C. (2011). Repairing alliance ruptures. *Psychotherapy, 48*, 80-87.
- Shafran, N., Kivlighan, D. M., Gelso, C. J., Bhatia, A., & Hill, C. E. (2017). Therapist immediacy: The association with working alliance, real relationship, session quality, and time in psychotherapy. *Psychotherapy Research, 27*, 737-748.
- Shapiro, D. A., & Shapiro, D. (1982). Meta-analysis of comparative therapy outcome studies: A replication and refinement. *Psychological Bulletin, 92*, 581-604.
- Shimokawa, K., Lambert, M. J., & Smart, D. W. (2010). Enhancing treatment outcome of patients at risk of treatment failure: Meta-analytic and mega-analytic review of a psychotherapy quality assurance system. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 78*, 298-311.
- Smith, M. L., & Glass, G. V. (1977). Meta-analysis of psychotherapy outcome studies. *American Psychologist, 32*, 752-760.
- Stiles, W. B., Glick, M. J., Osatuke, K., Hardy, G. E., Shapiro, D. A., Agnew-Davies, R., ... Barkham, M. (2004). Patterns of alliance development and the rupture-repair hypothesis: Are productive relationships u-shaped or v-shaped? *Journal of Counseling Psychology, 51*, 81-92.
- Swift, J. K., Callahan, J. L., & Vollmer, B. M. (2011). Preferences. In Norcross, J. C. (Ed.), *Psychotherapy relationships that work: Evidence-based responsiveness* (2nd ed., pp.316-335). New York: Oxford University Press.
- 田中伸明 (2006). 共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答の特徴について——クライエントへの影響も含めた検討 カウンセリング研究, 39, 113-123.
- 田中伸明 (2007). 共感を示すカウンセラーの応答とクライエントに知覚された共感との関連性——turn と back channel response の違いを考慮した検討 カウンセリング研究, 40, 208-217.
- 田中寿夫・神 信人 (2017). 初心者カウンセラーにおける共感の失敗に関する質的研究: クライエントが共感を知覚した場面と知覚しなかった場面でカウンセラーが感じていたこと ヒューマン・ケア研究, 18, 1-14.
- Timulak, L. (2010). Significant events in psychotherapy: An update of research findings. *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice, 83*, 421-447.
- Whipple, J. L., Lambert, M. J., Vermeersch, D. A., Smart, D. W., Nielsen, S. L., & Hawkins, E. J. (2003). Improving the effects of psychotherapy: The use of early identification of treatment and problem-solving strategies in routine practice. *Journal of Counseling Psychology, 50*, 59-68.
- 山本眞利子 (2008). カウンセラーとクライエントにおけるリフレミングが感情効果に及ぼす実験的研究 久留米大学心理学研究, 7, 29-33
- 吉見摩耶・葛西真記子 (2010). 治療同盟と面接評価に影響を及ぼすセラピスト側の要因—学生セラピストを対象とした内的作業モデルとクライエント反応評定を用いて 教育実践学論集(11), 27-37.
- 吉見摩耶・葛西真記子 (2009). 治療同盟と面接評価に影響を及ぼすクライエント側の要因: 内的作業モデルと認知反応評定を通して 心理臨床学研究, 27, 29-39.

The counselor-client relationship in psychotherapy: A qualitative analysis of counselors' and clients' experience

Yoshinobu KANAZAWA

(Department of Psychology, Meiji Gakuin University)

Madoka UENO

(Meiji Gakuin Institute for Psychological Research)

Naofumi YOKOZAWA

(Fujisawa Hospital/Meiji Gakuin Institute for Psychological Research)

Megumi NAKAYAMA

(Graduate School of Humanities, Gakushuin University)

Abstract

Five counselors (representing 8 cases) and 6 clients participated in semi-structured, individual interviews on positive and negative experience in therapy. Transcripts were subjected to qualitative analysis. Results indicated that all clients wanted to discuss personal material in a secure setting where they could feel safe. Five of the clients experienced discomfort in the process of counseling, when acceptance, empathy, and/or a clear boundary were not provided. Counselors' interventions that failed to meet clients' needs led to distress for clients. Counselors should be accepting and empathic, present a clear therapeutic framework, as well as accurately assess and respond to clients' needs.

Key words: process research, interview, critical incident technique,
grounded theory approach, counselor-client relationship